

令和2年度

日野市立教育センター紀要

第17集



日野市立教育センター

目次

あいさつ

「教育センター紀要第17集の発刊にあたって」 日野市立教育センター所長 正留 久巳……	1
「教育センターへの期待」 日野市教育委員会教育長 米田 裕治……	2
令和2年度 教育センターの部・係〈担当〉 ……………	3

A 調査研究部の事業

1 教科等教育係 「理科教育推進研究」 ……………	4
2 ふるさと教育係 「郷土教育推進研究」 ……………	9
3 教育資料・広報係 ……………	17

B 研修部の事業

1 教職員研修係 ……………	18
----------------	----

C 相談部の事業

1 学校生活相談係 ……………	22
2 登校支援としてのeラーニングを活用した学習支援 ……………	30
3 登校支援コーディネーター ……………	32
編集後記 ……………	34

教育センター紀要 第17集の発刊にあたって

日野市立教育センター所長 正 留 久 巳

令和2年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止の緊急事態宣言発令下での新学期のスタートとなり、授業再開は6月となりました。社会全体が大きく変化し、日常が一変しました。新しい生活様式のもと、学校は教育計画を変更し、様々な工夫と対応を図るなど厳しい状況の中、様々な取り組みを行いました。今年度は、日野市の第3次日野市学校教育基本構想がスタートし2年目でした。各学校も「こんなことをやっとう」「こんな指導をしたら子供たちが自ら取り組んでいく活動が生まれるのでは」など様々なアイデアや思いをもって臨もうとしていましたが、コロナ禍で計画変更を余儀なくされた状況でした。教育センターにおいても、同様でした。しかし、「子供たちが主体性をもち学びを進める力を育むため、現場とつながり、授業力の向上を支える」「現場に役立つ教育センター」の目標に向けて、一步でも前に進めるために、「できることをやる。柔軟に対応する。」という視点をもって変化する状況の中で工夫しながら事業計画を進めました。

コロナ禍における様々な制約のある中で、理科教育では研究主題を「ひのっ子が主体となる理科授業」とし、自然や事物とのかかわりの中で自ら考えようとする子供の育成のため、日野市ならではの教材の開発や提供、実技研修など実施しました。郷土教育では、研究主題を「郷土への愛着を高め、地域と共に生きようとする児童の育成～日野市の郷土関係機関や人材との連携を通して～」とし、七生の冊子の斬新な活用や1課4館との連携をもとにした教材づくり授業づくりを実施しました。若手研修では、コロナ禍での新しい生活様式のなかで、人材育成は教育の基盤づくりととらえ、個々の教員の良さを大切に、例年に比べ、研修の規模を縮小せざる得ない状況下であって、一層、丁寧な指導助言を進めました。

相談部の、登校支援では、市全体の状況のデータを、分析し未然防止と課題解決を各学校との連携を大切にすすめました。コロナ禍での状況でいろいろと見えたものもありました。また、わかば教室では、本年度、その子に応じた学び方を進め「主体的な学び」の実現を目指し「自分の未来を切り開く『学びの力』を育成する」ことを狙いに、「わかデミー」の時間をつくり、指導方法の工夫改善を図り実施してきました。令和2年度は、教育センターの発表会も、中止となりましたので、C4th（校務支援システム）での報告とさせていただきます。紀要と併せてご覧頂けると幸いです。

このコロナ禍で、いろいろなことを考えさせられました。歴史をみると、人間は様々な病原菌との戦いをずっと続けてきています。原因がわからず、拡大する被害に苦悩する中で、その時にできる対応をしてきています。日本には、自然災害もある中で、果たすべき責務をきちんと果たしてきている多くの先人たちの姿があります。科学技術が発展した現代では相手が何者であるかが見えています。終わりのない始まりはありません。苦難の時こそ、前を見て、大人がやるべきことをしっかりとやる姿を子供たちに示すことが肝要です。そして、このことによって可能性を秘めた子供たちの学びを支え続けていかなければならないと思います。

日野市の教育は「未来に向けた学びと育ちの基本構想」をもとに、新たな学びの創造に向かっています。これまでの経験をいかし、常に先駆的に、所員一同努力してまいります。今後とも、教育センターに対するご理解、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

教育センターへの期待

日野市教育委員会教育長 米田 裕治

日野市教育委員会では、平成31年3月に第3次日野市学校教育基本構想を策定いたしました。子供たち自身が「すべての“いのち”がよるこびあふれる未来をつくっていく力」を育んでいく環境を、学校、家庭、地域、そして子供たちみんなで作っていくこと。そのためのビジョンを定めました。

日野市立教育センターは、第3次日野市学校教育基本構想を日野市のトップランナーとして推進してきました。

また、今年度も、所員一人一人がこれまでの経験を生かして、教員の研修とともに、郷土教育や理科教育の推進、長期間登校することができない子供への支援を積極的に進めてきました。

わかば教室では、一律一斉の学習からの脱却を目指し、新しい取組として「わかデミー」をつくりました。わかデミーでは、一人一人が「自分でやりたいことを自分で決めて行う」とし、児童・生徒たち自ら考え、自分の学びを創造してきました。

研修部は、若手教員育成に重点を置き、若手教員が教師としての力量を高めるために、授業観察や学校に応じた支援を行いました。授業観察では、児童・生徒にとって分かりやすい発問や板書の工夫、児童・生徒が主体的に学習に取り組む授業展開など観点に沿って、具体的に指導・助言を行いました。また、若手教員の頑張りや課題を把握し、適切な指導・助言を行うことで若手教員の力量を高めていきました。

調査研究部では、「理科教育推進の研究」と「郷土教育推進の研究」を継続して進めました。理科教育においては、児童・生徒が主体的に学習課題を見付け、問題解決を図ることができるよう教員の支援に関する研究を進めました。例えば、日野市の地層に関する教材の作成と提供、メダカの卵やキャベツの苗など学習を支援する教材の配布を行いました。郷土教育においては、新型コロナウイルス感染対策を講じながら、推進委員の研究を支援しました。推進委員は、日野市に誇りと愛情をもったひのっ子の育成を目指し、授業実践を行い、オンラインによる実践報告を行いました。郷土教育推進研究委員会における実践の蓄積は、今後の日野の教育にとって大きな財産となります。

相談部では、登校支援コーディネーターが、日野市立教育センター、日野市発達・教育支援センター（エール）及び学校をつなぐ役割を担い、「日野サンライズプロジェクト」に基づく出席状況調査の集計やスクールソーシャルワーカーとの連携等、ひのっ子の健全育成のための体制づくりに努めています。また、わかば教室では、通室する児童・生徒が人や環境等と関わることを通して在籍校に復帰できるよう相談・指導・支援等を行うとともに、近隣の小学校、中学校との協力・連携に向けた取り組みを推進しています。

これからの日野市の教育をさらに充実させていく上で、教育センターの事業と経験豊かな所員の一層の活躍が重要になります。今後も、ひのっ子の学びと健やかな成長を支える教育・研究機関として、教育センターが学校や保護者・地域の方々の願いを生かし、「教育のまち日野」を実現するための研究、指導・支援を展開していくことを期待しています。

令和2年度 教育センターの部・係〈担当〉

所 長	正 留 久 巳
主任研究員 教育部参事	谷 川 拓 也
教育センター担当 統括指導主事	田 村 孝 夫
事 務 長	田 中 勉

	◆印（主任）	○印（係主担当）
調査研究部		
●教科等教育係	理科教育推進研究	◆岩 井 徳 二
〃		千 葉 正
●ふるさと教育係	郷土教育推進研究	◆清 野 利 明
〃		中 村 康 成
●教育資料・広報係		正 留 久 巳
〃		千 葉 正
〃		岡 部 秀 敏
〃		田 中 勉
研 修 部		
●教職員研修係		◆千 葉 正
〃		○岡 部 秀 敏
〃		○中 村 康 成
相 談 部		
●学校生活相談係	わかば教室（教室運営）	◆須 藤 昭 人
〃	〃 〃	○井 口 進
〃	〃 〃	池 本 ユウ子
〃	〃 （指導員）	藤 原 千 恵
〃	〃 〃	橋 本 友 美
〃	〃 〃	塚 崎 昌 代
〃	〃 〃	田 中 優 香
〃	〃 〃	星 野 ひとみ
〃	わかば教室カウンセラー	加 藤 枝利子
〃	〃	清 水 一 広
〃	登校支援コーディネーター	◆吉 村 正 久
〃	登校支援	酒 田 百合枝
事 務 部		
●事務職員		宮 澤 功 一
〃		佐 藤 信 一
用務員		守 屋 敦

A 調査研究部の事業

1 教科等教育係

—理科教育推進研究—

理科教育推進研究委員会

I 研究テーマ

「ひのっ子が主体となる理科教育」

II 研究テーマ設定の理由

昨年度の研究成果を基に更なる深化を目指し、これまでの研究テーマを引き継いで、今年も実践研究を進めることとした。

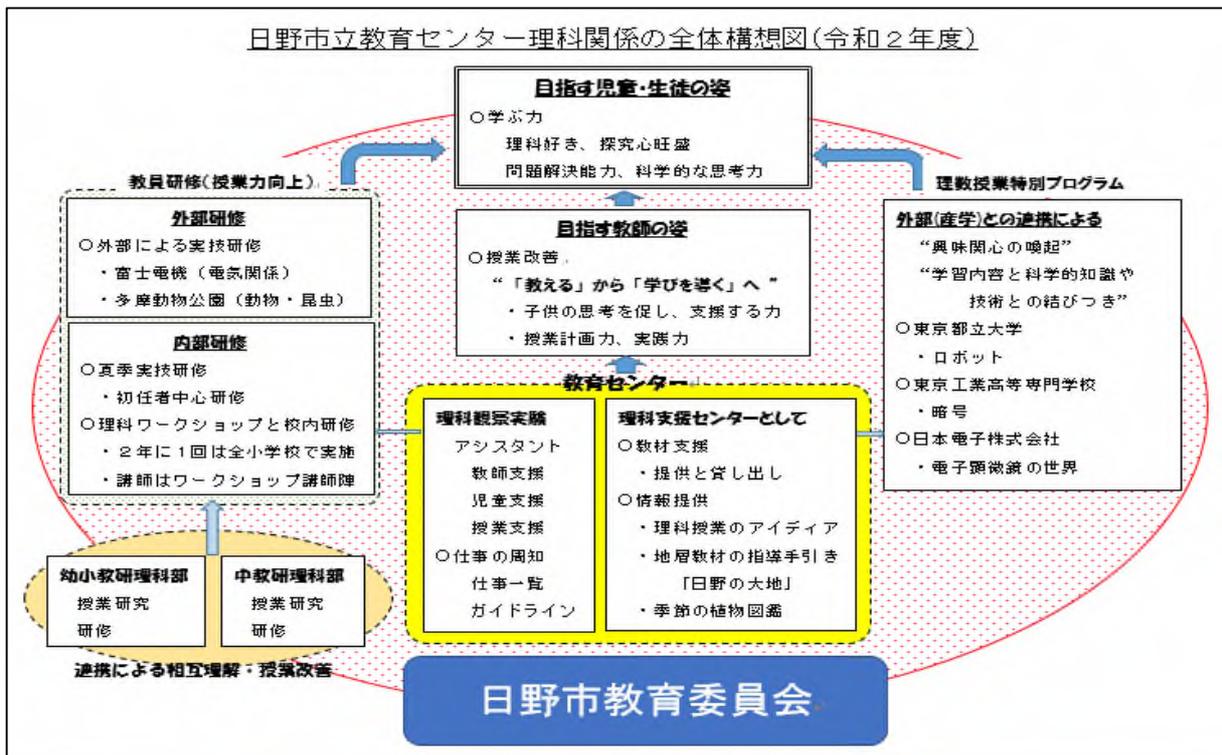
学習者であるひのっ子が主体となるためには、魅力ある理科授業を展開することが第一と考える。授業を支える要素である「教員の授業力向上」と「日野の自然を題材とする教材環境の整備」を中心に、本年度も研究テーマの実現に向けて取り組んできた。

研究の趣旨

自然や事物とのかかわりの中で自ら考えようとする子供を育てるため、教員の指導力向上と魅力ある理科授業を目指し、「理科支援センター」として学校・教員をサポートするあり方について実践研究する。

また授業への支援を通し、日野の自然についての教材化を推進する。

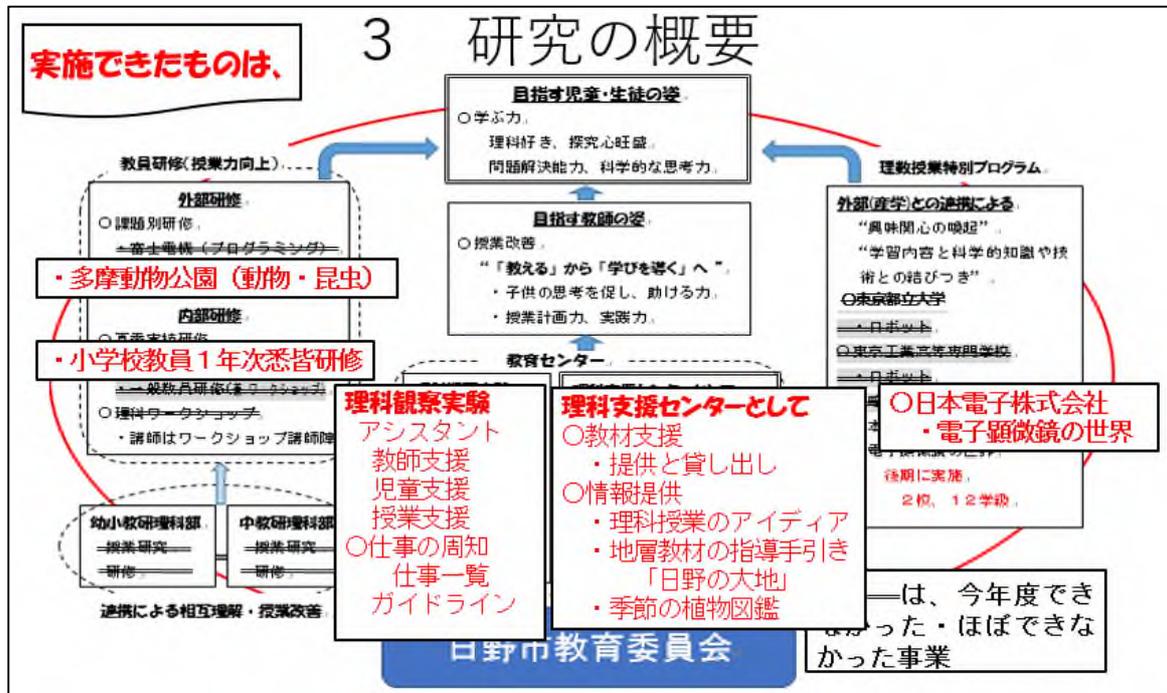
III 研究の構想



理科教育推進に関する取組みをまとめ、図に表したのが、この「研究構想図」である。理科支

援センターとしての取組みを中心に、日野市教育委員会や幼小教研理科部・中教研理科部との関連を示している。これらの関わりの中で学校、教員を支援することによって、研究テーマである「ひのっ子が主体となる理科教育」が推進できるものと考え、実践研究を進めた。

しかし、前年度末からの COVID-19 流行の影響で、対外的なかかわりのある活動が困難になり、実施できた活動は次の通りとなった。



一定の成果は上がったが、多くの課題が残った今年度であった。以下それらについて報告する。

IV 実践

1 研修を通して教員をサポートする取り組み

(1) コロナ禍における課題別研修

- ・三密を避けての会場設定
- ・内容を凝縮しての実施
- ・マスク着用や消毒といった衛生管理の徹底

① 理科実技研修(小学校教員採用1年次対象)

～教育センターで実施～

密集を避けるため理科室とパソコン室の2会場に分けた。

(講師は教育センター所員)



② 多摩動物公園研修

- ・昆虫スキルアップ実習
- ・自分と動物の体のつくりを比べてみよう
 11月・12月の2回に分けて実施
 定員をこれまでより少なくした。



※理科実技研修(実践編)、富士電機研修は中止

2 外部団体による出前授業の取り組み

「電子顕微鏡のミクロの世界」～日本電子株式会社～

(日野第四中学校、日野第五小学校において実施)

日野第五小学校においては緊急事態宣言発令下における実施で、2教室を使用した。電子顕微鏡の体験、昆虫や小動物の標本スケッチ、3D眼鏡による立体視のローテーションを、距離を取った会場設定で行った。机に向かってスケッチする際は、対面をさけて横並びの位置に着席するようにした。



※ 東京都立大学、東京工業高等専門学校による出前授業は、今年度は実施できなかった。

3 理科支援センターとして学校・教員をサポートする取り組み

(1) 教材教具の提供と授業を支援する資料の配布

① 教材の提供

- 各校からの希望に応じて、キャベツ苗・メダカの卵、関東ローム層の土、「土地のつくりと変化」日野バージョン資料DVDを配布
- その他の教材教具の貸し出し
貸出可能教材教具一覧表の公開



<貸し出しの実績>

気体採取器、多摩川の石(冊子)、大型てこ手回し発電機、双眼実体顕微鏡(ファールミニ)長さ1mのアクリルパイプ(「物の溶け方」用)海鳴りの丘の地層剥ぎ取り標本(郷土資料館より)

品名	数量	貸出校	貸出日	返却日	備考
キャベツ苗	10	日野第五小学校	2020.10.15	2020.10.25	
メダカの卵	50	日野第四中学校	2020.10.15	2020.10.25	
関東ローム層の土	10kg	日野第五小学校	2020.10.15	2020.10.25	
「土地のつくりと変化」日野バージョン資料DVD	10	日野第四中学校	2020.10.15	2020.10.25	
その他の教材教具	10	日野第五小学校	2020.10.15	2020.10.25	

② 情報の提供

- 年間単元配列・準備一覧
- 教育センター植物図鑑
- 昼間見える月カレンダー
- 小学校理科飼育・栽培の準備
- 台風について(台風の基礎的情報)
- カセットコンロやカセットポンベの経年劣化
(注意喚起の情報提供)

(2) 「日野の自然」の教材化

6年「土地のつくりと変化」日野バージョン資料DVDの配布(4校)とC4thでの公開
「海鳴りの丘」地層剥ぎ取り標本の活用
(郷土資料館より貸出を仲立ち)

関東ローム層試料のわんがけによる鉱物観察(教育センターより試料提供)



◎ 今後の取り組み

昨年度取り組んだ日野の地層観察を取り入れた指導計画に、より実感が持てるようにと新たな教材開発に取り組んできた。

多摩川右岸河床の上総層群中の海棲の貝及び有孔虫の化石の教材化

日野は大昔海の中に堆積した地層が、地殻変動で隆起して陸地になったと言われている。その証拠として多摩川河床の泥岩層よりクジラや海獣類、貝類の化石の産出が報告されている。実際の調査の結果でも、多摩川右岸、立日橋上流側の河床に貝化石の密集する泥岩層を確認することができた。また、その地層からは有孔虫の化石も見つかり、これらを活用して子どもたちに実際に化石に触れてもらうことで、日野の大地が本当に海の中でできたということを実感してもらおうと教材化することにした。

立日橋上流側の多摩川には広く上総層群が露出している。特に晩秋から冬季にかけては、多摩川の水量が低下することで安全に観察することができる。そこには穴じゃこの巣穴と思われる痕跡が多く見られ、隣接する下流側には貝殻の化石が密集する泥岩層が現れている。貝化石とともに泥岩層を採取し、学校に戻ってから掘り出してみるのはいい体験になるだろう。また、貝化石を取り出した残りの泥岩層を砕き、わんがけをして泥を洗い流した残りの砂を双眼実体顕微鏡や解剖顕微鏡で観察すると、大きさは1ミリにも満たないが、「有孔虫」という単細胞の原生動物の殻の化石を見つけることができる。ここで見つかる有孔虫の殻の多くは巻貝のような形をしていて、砂粒との見分けがしやすく児童にも見つけやすい。

遠方の学校には、この泥岩層から貝殻などを取り除いて有孔虫を含む砂を選別したものを、配布用に教育センターで用意した。

この情報を発信し、郷土日野の自然を活用した学習が実践されるよう各校にアプローチしていきたい。



4 理科観察実験アシスタント配置事業

理科授業の充実を目的に日野市立の全小学校で実施されている「理科観察実験アシスタント配置事業」。教材教具の準備や片付け、理科室・理科準備室の環境整備など、理科においては授業時間以外の仕事は多い。それをサポートするのが本事業である。授業者への支援、児童への支援を通して、教員の指導技術の向上と主体的に学ぶ児童の育成を目指してきた。

5 実施できなかった取り組み

(1) 理科ワークショップ

日野市立小学校における理科指導の中心となる教員の減少に伴って、理科ワークショップの在り方を検討する今年度であったが、COVID-19 感染症の広がりの中で一度も開催できなかったことが悔やまれる。幼小教研理科部の先生方により、C4th 上の公開で実施に代えていただいた。

(2) 幼小教研・中教研との連携

ワークショップ同様に研究会の集まりが実施できず、例年通りの関りが持てなかった。その中でも幼小教研では動画での指導例の発信を、中教研では授業の録画を見合っのオンライン授業研究会を開催し、研究に努めている姿は素晴らしいものであった。

V 今後の課題

小学校での外国語や道徳の教科化など、義務教育に期待される指導内容は年々拡大される中で、現場の先生方の理科授業充実への支援を役割とする理科支援センターとしての一層の取り組み努力が必要になっている。外部研修、実技研修、理科ワークショップなど、研修に関わる事業をどのように位置づけて運営して行くか、精選しながらも一層の効果を挙げられるよう検討して行くことが課題と考えている。

また、地層学習の補助資料「日野の大地のはなし」については、小学校 6 年生の単元を中心に、各校の地理的条件に応じた手引を作成し、授業に使用しやすい形に再構成して提供する予定である。

VI 研究委員会委員

- | | | | |
|---------------|----------|-------|------------------------|
| ・委員長 | 平山中学校長 | 和田 栄治 | |
| ・副委員長 | 仲田小学校長 | 沼田 忠晶 | |
| ・委員 | 学識経験者 | 馬場 武 | 元日野市教育委員会委員長職務代理者 |
| | 専属理科支援員 | 大澤 真人 | 教育センターOB・理科ワークショップ指導講師 |
| | 幼小教研理科部長 | 宮下 淳 | 日野第四小学校指導教諭 |
| | 中教研理科部長 | 伊藤 秀俊 | 日野第二中学校教諭 |
| ・担当指導主事 | | 赤羽 利章 | 日野市教育委員会 |
| ・理科教育コーディネーター | | 岩井 徳二 | 日野市立教育センター所員 |
| | | 千葉 正 | 日野市立教育センター所員 |

2 ふるさと教育係

—郷土教育推進研究—

I 研究の構想

1 研究主題

第3次日野市学校教育基本構想を受け、令和2年度の研究主題を「郷土への愛着を高め、地域と共に生きようとする児童の育成」として、副主題を「日野市の郷土関係機関や人材との連携を通して」と設定した。

2 活動の目標

研究主題に迫るために、以下の2点を目標にした。

- ・ 郷土に対する興味・関心を生かした探究的な活動を通じて、友達と共に考え、自分たちなりの答えにたどり着くことができる授業を創造する。
- ・ 郷土を感じ、郷土を考え、郷土への愛着を高め、自らの生き方を考える児童を育成するために、地域の多様な人々との連携による授業を工夫する。

3 研究の手立て

- ① 全体を4グループに分け、グループごとにテーマを設けて研究した。
- ② 授業実践を通じて実証的に研究を進め、メールを活用して指導案の検討を行った。
- ③ 1課4館（生涯学習課、図書館、中央公民館、郷土資料館、新選組のふるさと歴史館）と協働して授業づくりを行い、郷土学習の充実を図った。
- ④ 『歩こう 調べよう ふるさと七生』などの資料を効果的に活用して、児童が主体的に問題発見や問題解決を行うようにした。

II 郷土教育推進研究委員会の組織及び研究経過

1 研究の組織（○数字は人数）

令和2年度郷土教育推進研究委員会委員名簿

郷土教育推進研究委員会のメンバーは、委員長①、副委員長①、指導主事①、委員①、副委員①、指導主事①、顧問④、幼稚園教諭①、小学校教員⑦、生涯学習課①、図書館①、中央公民館①、郷土資料館①、新選組のふるさと歴史館①、及び事務局で構成されている。

役員・事務局	所長	正留 久巳	教育センター	Aグループ	委員	森 陽子	第二幼稚園 主査幼稚園教諭
	委員長	猿田 恵一	旭が丘小学校校長		委員	町田 植	日野四小教諭(世帯人)
	副委員長	秋田 克己	旭が丘小学校副校長		委員	北原 亜希子	潤徳小教諭
	指導主事	加藤 信秀	日野市教育委員会 学校課		委員	澤久保 敦	平山小教諭
	コーディネーター	清野 利明	教育センター		委員	秦 哲子	郷土資料館 主査学芸員
	所員	中村 康成	教育センター		委員	吉川 正浩	中央公民館 高幡台分室 主任
事務局	宮澤 功一	教育センター	顧問	高橋 清吾	日野第一中学校統括校長		
Bグループ	委員	柳井 大輔	日野一小教諭	Cグループ	委員	小野 泰裕	日野五小教諭
	委員	高橋 誠	豊田小主任教諭(世帯人)		委員	松岡 伸明	日野七小教諭
	委員	北村 紗緒里	滝合小教諭		委員	峰尾 燕子	東光寺小主任教諭
	委員	高取 裕章	旭が丘小教諭		委員	今西 基行	仲田小教諭
	委員	山田 瀬奈	多摩平図書館 主事 司書		委員	永吉 智洋	夢が丘小教諭(世帯人)
顧問	小杉 博司	元日野第一小学校校長	委員	高橋 秀之	新選組のふるさと歴史館 学芸員		
Dグループ	委員	石井 浩由	日野三小教諭(世帯人)	顧問	吉野 美智子	元百草台小学校校長	
	委員	市川 秀弥	日野六小教諭	各委員をA・B・C・Dの4グループに分け、それぞれに助言者として顧問が一人ずつ入った。			
	委員	三島 寛之	日野八小教諭				
	委員	森 清伸	南平小主任教諭				
	委員	高野 淳美	七生緑小主幹教諭				
	委員	藤田 淳子	生涯学習課 学芸員				
顧問	會田 満	元渋谷区立常盤松小学校校長					

2 研究の経過

新型コロナウイルス感染拡大や緊急事態宣言発令等に伴い、4月から6月は、委員会の開催を見合わせ、7月に第1回委員会を開催した。

コロナ禍の下で生活している幼児・児童のための郷土教育ということで、『**『郷土日野』との出会い、ワクワクの45分**』という授業のイメージを共有した。

また、中止となった夏季フィールドワーク研修会に代わるものとして、先生方に日野の素晴らしさや面白さを知ってもらい、郷土教育への関心を高めていただくための20のコンテンツを作成し、『**郷土学習資料室**』というフォルダーにアップした。

※ C4th→『リンク集』→『郷土教育資料』
→『郷土学習資料室』へ

令和2年度の研究の歩み

月	内 容
4月	◦研究計画作成
5月	◦グループ編制
6月	◦グループ世話人決定
7月	◦第1回委員会 ◦リモート会議 ◦グループテーマ決定
9月	◦グループ研究
10月	◦個人による実践研究
11月	(構想、情報収集、授業)
12月	◦研究のまとめ、発表
1月	◦研究報告会 (ビデオ収録)



「日野の郷土教育を一步前進！」

Ⅲ 研究テーマと実践事例

1 Aグループ

〔研究の内容〕

- ① 年少児「ぼくたち わたしたちのまち
日野に興味や親しみをもつ～『林丈太
郎・平山陸稲』を通して」

森陽子(第二幼稚園)

- ② 3年総合「高幡不動博士になろう」

北原亜希子(潤徳小)

- ③ 5年社会「自動車生産にはげむ人々」 澤久保敦(平山小)

- ④ 4年道徳「願いをこめた植樹」 町田禎(日野四小)

〔成果と課題〕

〈成果〉

- ・身近な題材を用いることで、自分の事として題材を考えさせることができた。
- ・幼児・児童の郷土を思う気持ちを育むことができた。
- ・1課4館との協力体制が築けた。

〈課題〉

- ・委員会外の先生方にも「郷土教育の授業を行っていただく」にはどうしたらよいか。

令和2年度
Aグループ
郷土への愛着を高める

世話人	森 陽子 (日野市立第二幼稚園)
	町田 禎 (日野第四小学校)
	北原 亜希子 (潤徳小学校)
	澤久保 敦 (平山小学校)
	秦 哲子 (郷土資料館)
	吉川 正浩 (中央公民館)
顧問	高橋 清吾 (日野第一中学校統括校長)



森 陽子委員自作の紙芝居『林丈太郎』

2 Bグループ

〔研究の内容〕

- ① 4年国語「パンフレットを読もう」

高橋誠(豊田小)

- ② 4年道徳「平山陸稲」

北村紗緒理(滝合小)

- ③ 4年社会「水害から暮らしを守る」

柳井大輔(日野一小)

令和2年度
Bグループ
主体的な学びから郷土にふれ郷土を愛する子供たちの育成

世話人	柳井 大輔 (日野第一小学校)
	高橋 誠 (豊田小学校)
	北村 紗緒理 (滝合小学校)
	高取 裕章 (旭が丘小学校)
	山田 瀬奈 (多摩平図書館)
顧問	小杉 博司 (元日野第一小学校長)

〔成果と課題〕

〈成果〉

- ・多様な教科での郷土教育の可能性を探ることができた。
- ・身近な郷土資料に児童の目を向けることができた。
- ・児童は新たな知識の獲得を楽しみ自分から深めていた。

〈課題〉

- ・興味・関心を一過性にしないためにすべきことは何か。
- ・「郷土を愛する児童」の具体的なイメージ。
- ・正確な資料へのアクセスの困難さ。
- ・児童が理解できる形に変換することの難しさ。



国語の授業で七生の冊子を使う

3 Cグループ

〔研究の内容〕

- ① 3年社会「日野市の様子と暮らしの移り変わり～京王線を通して見た日野～」
小野泰裕(日野五小)
- ② 3年総合「蚕の飼育体験を通して」
今西基行(仲田小)
- ③ 4年国語『『一つの花』と郷土教育」
永吉智洋(夢が丘小)
- ④ 5年社会『『これからの食糧生産』と日野の農業」峰尾恭子(東光寺小)
- ⑤ 5年算数「比べ方を考えよう」松岡伸明(日野七小)

令和2年度
Cグループ
郷土を活用した授業実践と教材づくり
～新しい見方・考え方を意識して～

小野	泰裕	(日野第五小学校)
松岡	伸明	(日野第七小学校)
峰尾	恭子	(東光寺小学校)
今西	基行	(仲田小学校)
世話人	永吉	智洋 (夢が丘小学校)
	高橋	秀之 (新選組のふるさと歴史館)
顧問	吉野	美智子 (元百草台小学校長)

〔成果と課題〕

〈成果〉

- ・実践的な授業・教材づくりに取り組むことができた。

〈課題〉

- ・郷土教育と教科をどのように関連付け、目標に近づけるか。



「江戸日本橋より九里」
江戸時代の一里塚を算数の距離計算で活用する



七ツ塚ファーマーズセンターで売られている日野産の農産物から「地産地消」を学ぶ

4 Dグループ

〔研究の内容〕

- ① 6年社会「日野市に残る古墳を活用して」 石井浩由(日野三小)
- ② 6年社会「日野市の子どもと戦争」 市川秀弥(日野六小)
- ③ 3年社会「まちの昔と今をくらべよう」 三島寛之(日野八小)
- ④ 6年社会「百草の地から見る鎌倉時代～幻の寺、真慈悲寺～」高野淳美(七生緑小)
- ⑤ 3年社会「大昔の暮らしや道具」森清伸(南平小)

令和2年度

Dグループ

郷土への関心、理解を深め、郷土への愛着を育む
教材の開発を目指して

世話人	石井 浩由 (日野第三小学校)	
	市川 秀弥 (日野第六小学校)	
	三島 寛之 (日野第八小学校)	
	高野 淳美 (七生緑小学校)	
	森 清伸 (南平小学校)	
	幕田 淳子 (生涯学習課文化財係)	
顧問	會田 満 (元渋谷区立常盤松小学校長)	

〔成果と課題〕

〈成果〉

- ・地域には多くの資源・資料があることが分かった。
- ・郷土への理解を深め、愛着を深めることができると感じた。

〈課題〉

- ・資料に対する教師の理解が必要である。
- ・資料を活用できる共有の場を用意し、周知していく必要がある。

「消えた大寺院、真慈悲寺」



歩こう 調べよう
ふるさと七生

(第2巻)

7 消えた大寺院を探ろう

■真慈悲寺は平安時代から鎌倉時代にかけて百草にあった大寺院。今は姿を消したが、手がかりはたくさん残っている。



正尊



正尊



正尊



正尊



正尊



正尊

真慈悲寺の歴史年表	
年	出来事
1185年	真慈悲寺の創建
1199年	真慈悲寺の焼失
1219年	真慈悲寺の再建
1281年	真慈悲寺の焼失
1333年	真慈悲寺の再建
1399年	真慈悲寺の焼失
1467年	真慈悲寺の再建
1524年	真慈悲寺の焼失
1571年	真慈悲寺の再建
1615年	真慈悲寺の焼失
1660年	真慈悲寺の再建
1703年	真慈悲寺の焼失
1764年	真慈悲寺の再建
1804年	真慈悲寺の焼失
1868年	真慈悲寺の再建
1945年	真慈悲寺の焼失
1989年	真慈悲寺の再建

～「武士の政治が始まる」における地域資源を活用した教材～
政治の中心が関東に移ったことを「真慈悲寺」からとらえる

以上、4つのグループが授業実践、教材研究等を通じて実証的に研究を行った。

IV ふるさと教育系の活動

1 1課4館の取り組み ～2020日野の郷土へのいざない～

コロナ禍で「まち歩き」ができないことから、1課4館(生涯学習課、図書館、中央公民館、郷土資料館、新選組のふるさと歴史館)と教育センターが結集総力を挙げ、市内の文化財と自然を取り上げ、画像や映像にまとめた。

NO	「郷土学習資料室」(1課4館他が作成した情報)	担当
1	中世の大寺院「真慈悲寺」(平安時代編)	D
2	縄文時代の暮らし～竪穴住居ができるまで～	A C
3	東京オリンピックのレガシー	C D
4	「謎解き!新選組のふるさと日野」～地域の歴史を調べよう～	E
5	「くらしの中に図書館を」～市民に身近な図書館の先駆け・日野～	B
6	富士山が爆発したら	D F
7	「平山陸稲栽培日記」～わかば教室との連携	F
8	平山陸稲のパネル展示(2か所)	F
9	パネル展「戦争体験を語り継ぐ」	C D
10	プールでがさがさヤゴ探し	D
11	『日野ニュース』『日野人の風を感じて』～受け継がれた煉瓦の歴史～	E
12	『日野ニュース』『日野人の風を感じて』～盃状穴の成因を探る～	F
13	『日野ニュース』『日野人の風を感じて』～ピンヘッド山の謂れを探る～	F
14	『日野ニュース』『日野人の風を感じて』～古代の氷室が日野にもあった～	G
15	『日野ニュース』『日野人の風を感じて』～古文書からみる日野用水と水車～	G
16	『日野ニュース』『日野人の風を感じて』～新選組の聖地を歩き、幕末の風を感じる～	E
17	『公民館だよりひの』『日野の風景』『王手は日野の万願寺』～江戸の守りは多摩川で～	F
18	『多摩のあゆみ』～『歩こう調べようふるさと七生(第2版)』の紹介～	G
19	「つぶやき」～取り組みへの質疑応答編～	F
20	わかば教室による東京都埋蔵文化財センターの社会科見学をオンラインで	C D F

担当; A 生涯学習課 B 図書館 C 中央公民館 D 郷土資料館
E 新選組のふるさと歴史館 F 教育センター G ゲストティーチャー

現在、「郷土学習資料室」には20のタイトルがあり、先生方が授業で活用しやすくするために、テーマ毎にコンパクトにまとめている。C4thに「郷土学習資料室」として公開中である。



生涯学習課・中央公民館制作



郷土資料館・中央公民館制作



新選組のふるさと歴史館制作

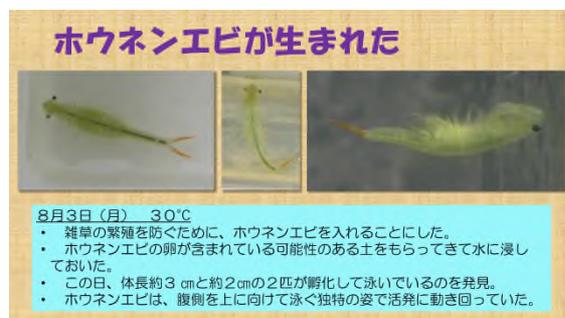


図書館制作

2 わかば教室との連携

① 平山陸稲の栽培体験

平山の林丈太郎が発見・改良した陸稲（オカボ）とは何か、水田の稲との違いは何かを確認する栽培体験を行いました。春先から田植えを行い、秋には「わかば教室」の子供たちと鳥よけの案山子を作成し、取り付けをした。



また、刈り取った稲の天日干しをした後、「脱穀」「粃摺り」「精米」を行った。採れたお米の食べ比べを子供たちと実施した。

② オンライン社会科見学の支援

わかば教室の社会科見学がコロナ禍で中止になったが、見学を予定していた東京都埋蔵文化財センターの展示をオンラインでの見学として行った。同センター館内の「常設展示」「体験コーナー」と野外の「縄文時代の復元住居」を手取るように見る事ができた。



埋蔵文化財センターでの収録



真剣な子供たち

中央公民館、郷土資料館及び教育センターが総力をあげての

新たな試みであった。オンライン見学に参加した子供たちからは、色々な質問が出て「ぜひ見に行きたい」との声が上がっていた。

3 『歩こう 調べよう ふるさと七生(第3版)』の刊行

毎年、新3年生に『歩こう 調べよう ふるさと七生』を配布している。今回の改定したポイントは、子供たちが使っている教科書に合わせて「年代」の表記を「西暦(年号)」とし、西暦を最初に表記するスタイルにした。



4 若手教員育成研修会（1年次）の支援

毎年11月に行っている「若手教員育成研修会（1年次）」に協力した。コロナ禍の対応で、フィールドワークを講義形式に変更した。

この研修会のねらいは二つあり、「日野の地域資源を生かした授業づくりを進めていくこと」と「外部機関との連携の大切さを知り、授業づくりに生かすこと」であった。

生涯学習課文化財係の学芸員から「平山地域の文化財について」、東京都埋蔵文化財センターの調査員から「平山遺跡の発掘調査について」の動画を駆使しての講義があった。「新型コロナウイルス感染症が収まれば発掘調査現場を子供たちと見学したい」との先生方の真剣な気持ちを掻き立てる講義であった。



東京都埋蔵文化財センター調査員の話を目で聴く



真剣な眼差しで遺物と向き合う

V 令和2年度；活動の成果と今後の課題

1 活動の成果

- ① 子供たちの身近な題材を取り上げることで、自分のこととして考え、郷土への親しみや興味を感じさせることができたこと。
- ② 様々な教科で、郷土教育と結び付けた授業に効果があると分かったこと。
- ③ 1課4館の情報や資料提供で効果的な教材開発ができたこと。併せて1課4館が、「郷土学習資料室」での情報提供も行ったこと。



陸稲を脱穀した後、粃とごみを選り分ける子供たち

2 今後の課題

- ① 先生方が気軽に郷土教育に取り組めるようにするにはどうすればよいかを研究すること。
- ② 新たな郷土教材を開発し、授業を通してその効果を検証すること。

3 教育資料・広報係

広報活動

1 教育センターの Web サイト

(1) Web サイト運営の趣旨

①教育センター事業の広報の役割

情報ネットワークが高度に発達し、インターネットが広く普及している今日、情報の配信や情報伝達的手段として、Web サイトが広く活用されている。教育センターにおいても、Web サイトを活用し、センター事業の活動内容や状況を広く学校関係者をはじめ、市民の方々にもお知らせし、多くの方々からのご理解を頂くことに努めている。

②教員の授業力向上のために

日野市内の小・中学校においては、教員用に1台ずつ、パソコンが配布されている。それらは、全てネットワークで結ばれており、各小中学校と教育センターとの情報交換や教育情報がパソコンを通して見ることができる。

(2) 教育センターWeb サイトの主な内容

①教育センターの概要

○各係の活動内容・活動報告やわかば教室の活動等の報告

○教育センターの作成資料、教育センター要覧、教育センターだより、教育センター紀要等の掲載

②郷土教育推進研究委員会作成の「郷土日野」指導事例集 第1集～13集と「歩こう 調べよう ふるさと七生」の掲載

2 「教育センターだより」の企画・編集

教育センターの事業活動の紹介とともに、成果の普及と事業の理解を図るため、年2回（令和2年度は9月と1月）発行し、市内公立幼稚園・小学校・中学校及び市内外関係諸機関に配布している。

内容は各部事業のテーマや活動方針や計画、活動経過報告などである。広報紙として、より多くの方々に読んで頂けるように、さらに内容の充実と工夫・改善をすることが今後の課題である。

3 「教育センター紀要」の発行

本センターの各部事業の成果と課題を明らかにし、その普及と活用の促進を図るために、年1回発行し、市内公立幼稚園・小学校・中学校及び市内外関係諸機関に配布している。

4 教育資料室の資料管理

図書管理システムを使用して、教育資料室内の全ての書籍・資料を登録し、日野市立小・中学校の図書室のパソコンからセンター蔵書の全てが検索できる状態にある。

センター内の予算を活用して、教育資料の補充を図っている。

B 研修部の事業

1 教職員研修係

若手教員の育成に取り組む教育センターの活動

I 研修部教職員研修係の主な業務

- ・若手教員の1年次から3年次までの育成研修における授業観察と指導
 - ・2年次、3年次若手教員の夏季課題別研修における指導助言
 - ・教育センターで行われる研修会や夏季教員研修全体研修会の受付業務や会場設営の支援
- ※ 若手教員の授業観察及び指導は研修部所属の3人の所員（他の業務とも兼任）で分担して行った。

II 若手教員育成研修

1 指導内容と人数

	指導内容	小学校	中学校	合計人数
1年次	年間3回の授業観察と指導の実施	27名	12名	39名
2年次	年間1回の授業観察と指導の実施	25名	19名	44名
3年次	年間1回の授業観察と指導の実施	16名	17名	33名

※ 1年次若手教員の人数には期限付任用教員の数を含む

2 1年次若手教員の育成

年3回、所員が1年次若手教員のいる学校を訪問し、授業観察及び指導を行った。

☆主な指導の観点は、

- ・学習指導案が適切に作成されている
- ・児童・生徒と良好なコミュニケーションが図れている
- ・説明、発問は児童・生徒の理解度を把握しながら行い、分かりやすい
- ・板書は計画的で、学習の流れを示し、丁寧である
- ICT機器を適切に活用し、UDを考慮している
- ・教材研究を継続して行っている
- ・話し合い活動の準備は適切に行われている
- ・児童生徒に変容がみられる

など

1年次では、よかった点や課題を示し、次の授業に向け改善策を話し合い、若手教員の指導にあたった。

1回目の授業観察の頃は、まだ児童・生徒の様子を見て説明や発問することが十分とは言え



ず、話も教員からの一方通行になる傾向が見られた。

しかし、校内での OJT による指導や本人の地道な努力もあり、3 回目の授業観察の頃には、基本的な説明・発問・板書のスキルが向上し、児童・生徒の表情や発言から理解の度合いを把握し、授業を進めようとするゆとりが見られるようになった。また、児童・生徒とのコミュニケーションも自然な感じで図れるようになり、先生としての存在感が増し、信頼関係の深まりを感じる事ができた。

引き続き、教員としての基礎・基本を身に付けるため、話術を磨くこと、教材研究を続けること、児童・生徒理解を深め、人権感覚を大切にするように指導、助言した。

3 2 年次若手教員の育成

年 1 回、所員が 2 年次若手教員のいる学校を訪問し、授業観察及び指導を行った。

☆指導の主な観点として

- ・ 1 年次の成果と課題を踏まえ、ねらいが明確で授業の流れにメリハリがあり、山場を明確にした授業展開となっている
 - ・ 興味・関心を高め、理解を深める教材の開発を行い、ICT 機器の適切で効果的な活用と UD の取り組みをしている
 - ・ 教科指導における生活指導のありかたを理解し、授業規律やルールの徹底を行っている
- など

2 年次では、より実践的な指導力をつけるため、授業改善の助言を行った。

授業力の向上では単元のねらいをしっかりと理解し、山場を適切に設定した授業展開を目指すように話した。

また、次年度に向けて、児童・生徒の疑問や要求にも多面的に対応できる力を付け

ていくことが課題となることを、担当所員の豊富な経験を活かし、具体的な例を挙げながら指導にあたった。



4 3 年次若手教員の育成

年 1 回、所員が 3 年次若手教員のいる学校を訪問し、授業観察及び指導を行った。

☆指導の主な観点として

- ・ 主体的で、対話的で、深く考えさせる実践的な授業を目指し、問題解決型授業への取り組みがみられる
 - ・ 児童・生徒の疑問や要望などに、即座に対応できる授業を目指し、専門性を高めようとしている
 - ・ コミュニケーション能力を高め、表現力を育成する指導の工夫を行っている
 - ・ 外部との連携や学校の組織的な動きについて理解を深めている
- など

3 年次では授業力の向上が随所でみられるようになる。滑らかな導入、メリハリのある授

業の流れ、ねらいに合致した山場があり、振り返りも簡潔に行われる授業展開を見ることが多く、また、児童・生徒の思考スピードに、教員の教えるスピードが合っていると感じることも多い。

3年次若手教員の大きな成長を目の当たりにするとき、本人の日々の努力はもちろん、多くの先輩教員による地道で丁寧な指導があったことを強く感じるものであった。

5 夏季若手教員育成研修

毎年、夏季に行われていた2年次、3年次の若手教員を対象とした半日単位の研修は、今年度、感染症拡大防止対策のため中止され、自校での代替研修となった。

III 日野市教育委員会主催研修会への支援

日野市教育委員会が開催する日野市立幼稚園・小学校・中学校教員対象の研修会で、主に教育センターで行われる研修会と夏季教員研修の全体研修会及び課題別研修会の受付・会場表示、募集業務、受付名簿作成、会場設営等の支援を行った。

今年度は各種の研修会が感染症拡大防止対策のため中止やオンラインでの研修になったりして、前年度より支援回数が減っている。

*支援を行った主な研修

- ・若手教員育成研修（1年次）（教育センターで実施の研修4回）
 - ・夏季教員研修課題別研修会「がん教育に関する研修」
 - ・理科実技研修（基礎） ・「多摩動物公園」研修（11月実施）と（12月実施）
- 「第10回若手教員育成研修（1年次）の様子」



1年次の若手教員が全員集まって実施できた研修は感染症拡大防止対策のため少なかった。

IV 「若手教員の授業観察のためのガイドライン」について

【1】ガイドラインを設定する趣旨

- (1) ガイドラインは、教育センターの研修部員による授業観察が学校と共通の認識のもとに設定した視点に基づいて行なわれ、若手教員の授業力向上に資するものになることを目的とする。

- (2) ガイドラインを設定することで、授業観察の視点を明確にし、事前に学習指導案をもとに授業観察の準備ができるようにする。

【2】 研修部員との事前連絡及び授業観察のやり方

- (1) 授業観察日の取り決め ・ ・ 研修部員と副校長とが連絡を取り、日時を設定する。日時の変更についても副校長を通して行う。
- (2) 学習指導案の提出 ・ ・ 学習指導案は、指導のための基本的資料である。提出にあたり、管理職や指導教員の指導を受け、授業観察一週間前には提出する。必要に応じて資料等も送付する。必要に応じて学習指導案の書き替えを指導・助言する。
- (3) 授業観察の指導 ・ ・ 指導時間は一単位時間とする。
- (4) 観察以降の指導 ・ ・ 授業観察以降も管理職に相談し、必要に応じて若手教員の事後指導をする。

【3】 学習指導案作成の仕方 ・ ・ 学習指導案の書き方については、原則的には、令和2年度〈東京都若手教員育成研修〉「1年次（初任者）研修」（東京都公立小学校・中学校）の研修テキストを参考にする。

特別支援学級担当については、令和2年度〈東京都若手教員育成研修〉「1年次（初心者）研修」（都立特別支援学校・区立特別支援学校 東京都公立学校特別支援学級）の研修テキストを参考にする。

【4】 若手教員の授業の指導における重点

- (1) 1年次 ・ ・ 授業における基礎的・基本的事項（学習規律等も含む）の資質・能力の育成を図ることを目的とし、学習計画に沿って授業を実施することができるように指導・助言する。
- (2) 2年次 ・ ・ 年間指導計画を踏まえ、単元及び一単位時間における児童・生徒に身に付けさせたい力を明確にした授業ができるように指導・助言する。そのために教材を工夫した実践的授業の指導力の向上を図る。
- (3) 3年次 ・ ・ 学校の教育課題の解決に向けた授業実践ができるように指導・助言し、あわせて、外部との連携や学校運営力等の課題解決力の伸長も図る。

【5】 授業を観察する上での視点

- 【目標】** ①教科・科目等の目標→単元の目標→本時の目標が一貫しているか（指導観の把握）
②児童・生徒に身に付けさせたい力は明確か。
③本時の指導に、「児童・生徒観」が生かされているか。
- 【展開】** ④本時の目標を達成するための学習活動となっているか。
⑤授業における指導や学習活動のポイント（山場）はどこか。
⑥「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が図られているか。
⑦時間の配分は適切か。

【学習活動に即した評価、指導上の配慮事項】

- ⑧本時の目標と評価項目との整合性があるか。
⑨児童・生徒の学習意欲を高める学習活動の工夫があるか。
⑩児童・生徒の学習の定着の状況に応じた、個別の指導の工夫が明記されているか。

令和2年4月1日 改訂

C 相談部の事業

1 学校生活相談係

I 学校生活相談（日野市わかば教室）の概要

ICTやSNSなどの、社会のグローバル化が急速に進化・発展している中で、学校では長期欠席や登校しぶりなどが、青少年の健全な成長に関わる大きな課題となっている。

これらの課題に対応するため、児童・生徒の学校復帰及び社会的自立のための支援や適応指導を行うことを目的として、平成12年4月1日「日野市適応指導教室設置要綱」が施行された。これに伴い、同年5月に日野市適応指導教室「わかば教室」が開設された。その後、平成16年4月「日野市立教育センター」設置に伴い、同センターの相談部（学校生活相談係）となった。そして平成31年4月1日「日野市わかば教室設置要綱」が施行されたことに伴い、その役割がますます重要になっていることを踏まえ、以下の事業を行っている。

II わかば教室の事業

Ⅲの2で述べる児童・生徒が抱える要因・背景により、長期欠席状況にある児童・生徒を対象に、個々の状況に応じた支援・指導を通して、学校復帰に向けた支援とともに、将来の社会的自立を視野に入れた支援・指導を行う。

1 わかば教室の目的

- (1) 安心して過ごせる「学びの場（居場所）」とする
- (2) 「学校復帰」ができるようにする
- (3) 将来、「社会的自立」ができる力を育む

2 わかば教室の支援・指導の基本方針

「わかば教室」の主な活動（4つの柱「個に応じた教育活動」「豊かな体験活動・スポーツ」「教育相談」「個別支援の記録」）を通して支援・指導を行う。

- (1) 児童・生徒一人一人に合った進捗で学習を進め、基礎学力を身に付けさせる
- (2) 体験活動を取り入れそれぞれの活動を通して自立のための支援を行う
- (3) 児童・生徒の「よき相談相手」「よき学び相手」「よき触れ合い相手」になって指導する
- (4) 教育相談を継続して行うための個別の支援記録を作成する
- (5) 在籍校・保護者と連携し、本人の学校復帰を支援する

3 わかば教室の生活

日 課（令和2年度生活時程）

9：20～ 朝の会（歌・連絡等）	※学習タイムは、国語、算数(小)・数学(中)、英語(中)を中心とした学習と、わかデミー(学習支援)、eラーニングの時間
9：30～ 学習タイム1・2（各40分）	
11：10～ 学習タイム3〔わかばタイム〕 （50分）	※わかばタイム・昼食・ミーティングの時間は小学生・中学生合同で実施
12：00～ 昼食・昼休み	※個別面談(相談)は児童・生徒の状況により生活時程の中で行う
13：00～ 清掃(火・金)、ミーティング(水)、運動	
13：15～ 学習タイム4・5（各30分）	
14：30～ 帰りの会（歌・翌日の連絡等）	

4 入室・退室の手続き

(1) 入室の手続き

- ① 保護者が、学校や教育委員会、発達・教育支援センター（エール）等に連絡するか、又はわかば教室に直接申し込みをして「見学」と「入室相談」をする。
- ② 児童・生徒と保護者が入室を希望する場合、体験通室を段階的に経た後「入室願」を在籍校の校長に提出する。校長は、入室が適切と判断した場合「入室申請書」を作成し、保護者から提出された「入室願」を添えて日野市教育委員会に提出する。
- ③ 教育委員会が承認すると「入室許可書」が発行され、入室が決定する。

(2) 退室の手続き

- ① 保護者が「退室願」を在籍校の校長に提出する。
- ② 校長は、「退室申請書」を作成し、保護者から提出された「退室願」を添えて、日野市教育委員会に提出する。
- ③ 教育委員会が承認すると、退室が決定する。

Ⅲ 令和2年度の通室利用

1 入室児童・生徒数の推移

(1) 平成29年度から令和2年度の入室児童・生徒数の推移（単位：人）

年 度	小学生	中学生	合 計
平成29(30年2月28日現在)	18	53	71
平成30(31年2月28日現在)	15	57	72
令和元(2年2月29日現在)	22	69	91
令和2(3年2月28日現在)	14	48	62

※体験通室者を含む。

(2) 令和2年度の入室児童・生徒数の推移（体験通室者を含む）（令和3年2月28日現在）

令和2年度	小 学 校						計	中 学 校			計	合計
	1	2	3	4	5	6		1	2	3		
4月30日	0	0	0	1	6	5	12	0	21	17	38	50
5月31日	0	0	0	1	6	4	11	0	20	17	37	48
6月30日	0	0	0	1	6	4	11	1	21	17	39	50
7月20日	0	0	0	1	6	4	11	1	22	17	40	51
8月31日	0	0	0	1	6	4	11	1	23	17	41	52
9月30日	0	0	0	2	6	4	12	3	24	18	45	57
10月31日	0	0	1	2	5	3	11	3	20	19	42	53
11月30日	0	0	1	1	4	4	11	3	20	17	40	51
12月25日	0	0	1	2	3	5	11	6	23	16	45	56
1月31日	0	0	2	1	3	6	12	6	23	16	45	57
2月28日	0	0	3	1	3	7	14	6	26	16	48	62

学校復帰 小…5人、中…12人、計17人

2 「わかば教室」に入室する児童の長期欠席の要因・背景

児童・生徒の登校できない主な要因・背景は、友人関係、委員会・部活動等学校生活に関わること、教員との関係、学校の対応（学校不信）、学業不振、生活習慣への不適応、身体的・精神的・心理的要因等本人自身に関わること、親子関係、家庭内環境、入学・進級・転校時の不適応、現代の社会的環境等複合的なケースが多い。（入室時の面談より）

3 「わかば教室」の教育活動

児童・生徒一人一人の抱える課題を観察・面談等で把握に努め、個別の支援・指導計画を立て、指導員が共通認識を図りながら支援・指導している。また、個々の生活・学習・面接等の様子を記録・共有をすることで、以後の支援・指導・相談に生かしている。

今年度も他の通室生との関わりができない児童・生徒がいたため、教室の使用法やグループ編成の工夫などをし、個々に応じた支援・指導・援助ができるよう努めた。

(1) 体験活動

年間を通して児童・生徒が体験活動に参加することを通して、楽しく充実した時間を共有することで人間関係を深め、自己肯定感や達成感もてるように行事を計画し実施した。

今年度、実施した行事は、次の表の通りである。また、「わかばタイム」を午前中の最後の「タイム3」の時間帯に設け、作文、スポーツ、音楽、栽培、図工を曜日ごとに行った。いずれも『ヒト、モノ、コト』に関わる活動や体験活動が必要と考え、異年齢で協力し成し遂げ達成感も味わえるように、児童・生徒の実態を考慮しながら実施した。

令和2年度のわかばタイム

曜	時間帯	内容
月	T3	作文
火	T3	スポーツ
水	T3	音楽
木	T3	栽培
金	T3	図工
T3 *11:10~12:00		

令和2年度に実施した行事

月	内 容
4月	
5月	
6月	
7月	避難訓練、スポーツ大会
8月	
9月	誕生日会
10月	
11月	学習発表会
12月	スポーツ大会
1月	新年を祝う会(書初め、凧揚げ)、社会科見学
2月	誕生日会
3月	卒業・進級を祝う会、お楽しみ会

- ① 学習発表会では、児童・生徒が授業やわかだミーで取り組んだ学習の成果を展示発表した。数学統計学、陶芸・水彩画・水墨画・版画・書写・俳句・eランペイント作品・詩など内面の豊かさがあふれ出た作品が展示された。

児童・生徒は、「みんな1人1人感情をこめて作っているのが伝わってきたので、すごかったです。」「様々な作品があり、自分以外の人の作品を見て、



こういう表現もあるんだな、と思った。」などの感想文を書いている。

- ② 社会科見学は、通室生がお互いに親しくなるとともに、多摩動物公園の多様な動物の生態を観察することで「生命の素晴らしさを感じる」ことを目的として実施した。事後学習として、見学した体験をもとに、国語の授業で俳句を作成したり水墨画に表現したりするなどして、学びを発展させることができた。



- ③ 2月に社会科見学で「先人の知恵と工夫を感じ、多摩丘陵の歴史を学ぶ」ことを目的に、「東京都埋蔵文化財センター」との連携授業(社会科見学)をオンラインで実施した。発掘された遺跡や復元された住居や道具を見学した。児童・生徒は、担当者の説明を聞き、縄文時代の暮らしや生活について学ぶことができた。



(2) 学習指導(支援・指導)

- ① 学習不振が原因で登校できなくなった児童・生徒もいれば、長期欠席となったために学習に遅れが生じた児童・生徒もいる。そのため、学習の目的も「分かるようになりたい」「学習の遅れを取り戻したい」「高校入試のため」等様々である。そこで児童・生徒一人一人に応じて、基礎的な学習の支援・指導に努めた。
- ② 小学生は午前の学習タイムに国語、算数及びeラーニング(週2回)を活用した学習を行い、授業の中で個々の状況に応じて個別指導を行った。また、SSTの時間には、ゲーム的な活動をしたり校庭や体育館で活動するなど、楽しく取り組める活動を展開した。
- ③ 中学生は国語・数学・英語の3教科を中心に学習した。一斉授業を行うこともあるが基本的には個別学習(個別支援)である。eラーニングを活用した学習は火・木の週2回行い成果をあげている。中学3年生は進路(受験)に向けて書類作成の支援や作文指導・面接練習も行った。
- ④ わかデミー(学習支援)は自分がやりたいことを自分で考えて決める(自主性・主体性を育てる)が目標の時間である。今ここでしかできない学びを進める時間となっている。
- ⑤ 教室(授業)に入れない児童・生徒は、別室で一人一人の習熟の状況に応じて、時間割や教材を用意して指導に当たってきた。分かるところから始め、意欲を高め、学力が向上するように努めた。

(3) SST(ソーシャル・スキル・トレーニング)

自己認知スキル、コミュニケーションスキル・社会的行動が身につくためのトレーニングを行っている。具体的にはゲームやエンカウンターワークシートを使って自分の考えや他の人の意見を聞き、自分自身を客観的に見つめる場面を作っている。また、今年度の傾向として他者とのコミュニケーションが苦手な児童・生徒が多いため、少人数でのグループトークも行っている。この時間を楽しみに通室してくる児童・生徒も多く見られた。



(4) eラーニング

eラーニングは火曜日と木曜日の週2回行っている。一人一台のPCを使い、インタラクティブスタディ(国、数、英、社、理)、タイピング、ペイント、プログラミング、Wordのいずれかを自分で選び、取り組んでいる。プログラミングを通して先を見通す力や、



工夫して考える力がついてくる。その日の自分の状態や気持ちに合わせて活動内容を選ぶことが出来ることもあり、参加できる児童・生徒が増えた。また、他の児童・生徒の活動を見て、自分も挑戦してみようという場面も多く見られ、児童・生徒同士の対話的学びの場面も感じられる時間となっている。

(5)生活指導

通室している児童・生徒は、心理的不安、人間関係の不安や悩み、生活リズムの乱れ、ゲーム依存、家庭環境等様々な課題を抱えている。これらの諸問題を改善できるように、今年度は次の目標を設定し支援・指導に当たってきた。

子供たちの生活目標	《生活指導目標》
<ul style="list-style-type: none"> ・友達と仲良くしよう。 ・規則正しい生活リズムを身に付けよう。 ・しっかり学習しよう 	<ul style="list-style-type: none"> *夢や希望をもたせる *基本的な生活習慣を身に付け、自ら行動できる力を育てる *相手の気持ちを考え、人を大切にする心を養う *健康な体を作る *安全指導を徹底し、事故防止に努める

目標達成のために、指導員は常に報告・連絡・相談を行い、児童・生徒に対して共通認識を図りながら指導に当たり、一人一人の個性・特性・可能性を伸ばすように心掛けた。

週1回のミーティングは通室生の情報交換と支援のステップや日常生活の改善指導、学習、行事への取り組み、安全指導等について検討した。また、対人関係における適切な言葉遣いや関わり方についてのSST活動をカウンセラーの支援を得て行ったことにより、コミュニケーションを取り、挨拶や適切な言葉遣いができるようになった通室生が増えてきた。

4 「わかば教室」の教育相談活動

(1) 児童・生徒の教育相談のねらい

- ① 心理的に安定し、継続して「わかば教室」に通うことができるようにする。
- ② 友達や先生（所員・指導員・カウンセラー）を信頼し、人と関わる楽しさを知る。
- ③ 目標を立てて、主体的に活動し、自分に自信をもち、自己肯定感をもつ。
- ④ 学校復帰についてのステップを共に考える。

(2) 保護者との教育相談のねらい

- ① 児童・生徒の生育歴や、家庭や学校での状況を把握しながら、長期欠席となった経緯や要因を理解する（場合によっては、保護者のカウンセリングも行う）。
- ② 児童・生徒をどのように成長させていくかを共に考え、個々の状況に合った学校復帰の方法を考えていく。

(3) 教育相談の方法

- ① 初回面談の実施（担当所員）：対象の児童・生徒と保護者に対して「わかば教室」について説明し、保護者に面接票に記入してもらい、学校へ登校できなくなった経緯や生育歴及び今後についての考え等の聞き取りを行った。
- ② 定期的な個別面談(カウンセラー)の実施：児童・生徒の状況に合わせ、週に1回から月に1回位の割合で30分から1時間程度の個人面談を行っている。また、相談スケジュールを毎月作成して、職員が確認できるようにしている。児童・生徒に対しては面接終

了時に次回の日程の確認・調整を行い、計画的に実施した。

- ③ 随時の個別面談(カウンセラー)の実施：集団活動に参加できない児童・生徒から個別に話を聞いたり、活動の相手をしたりすることで徐々に集団活動への参加を働きかけた。また、指導員との関係作りを手掛かりに2～3人の小グループ、同学年グループ等、少しずつ人間関係が広がるよう支援した。通室が安定しない児童・生徒には電話や手紙で連絡し、面談を計画するなどして本人が通室できる環境づくりに配慮した。
- ④ 保護者面談(カウンセラー)の実施：保護者から依頼があった場合や通室生の状況に応じて行っている。来室の機会がもてない保護者には電話連絡で対応している。
- ⑤ 児童・生徒の教室内での様子や、面接での様子、学校その他関係機関での児童・生徒の様子を把握し、所員・カウンセラー・指導員が個別の指導・支援について検討し、共有することで、後の支援・指導や日常の活動への対応に活かしている。

(4) 教育相談の成果

- ① 初めは人と関わることに不安や抵抗を示していた児童・生徒が、指導員・カウンセラー等との関わりの中で徐々に信頼感をもつことができるようになり、他の児童・生徒とも関わる機会が少しずつ増えてきた。
- ② 人と関わることに苦手意識のある児童・生徒も、行事やスポーツ・ゲーム等を通して指導員、仲間と過ごすことで徐々にコミュニケーションが取れるようになってきている。さらに人と関わることで、自分に自信をもち人に対する信頼感をもてるようになってきている。このことが、通室の継続につながっていると考えられる。
- ③ 相談を通して自分自身を振り返り、自分の良い面に気づき、自信を持てるようになってきている。また、自分自身の課題にも気づくようになってきた児童・生徒もいる。
- ④ 学校復帰の可能性が見え始めた児童・生徒に対しては、スモールステップで復帰まで支援を行った。学校や保護者・関係機関と相談・協議しながら、児童・生徒をそれぞれが支えることで復帰につながりつつある通室生もいる。
- ⑤ 個別の支援・指導方法を考え、指導員やカウンセラーがそれぞれの立場から意見を出し合い、児童・生徒を多面的に捉え分析・共通認識することで、その児童・生徒に合った支援・指導を行うことができている。

(5) 今後の課題

- ① わかば教室に、学校、発達・教育支援センター（エール）、病院及び他の機関からの紹介で来室するケースと、保護者が自ら探して来室するケースなど様々な経緯があるため、初回見学時のアセスメント（学校で頑張れそうか、わかば教室で受け入れ対応すべきか、一般教育相談や特別支援教育、医療機関における対応の方が適しているか等）が今後の支援を見立てる上で重要である。
- ② わかば教室でエネルギーを蓄えることができても、学校に復帰することが難しい現状がある。学校のリソースルームやステップ教室・保健室・相談室の利用や、放課後に登校して担任の先生と面談すること等、部分登校に努力する姿が見られる通室生について、在籍校の教室で過ごすことは大きな一歩である。一方、クラスや部活動の中に話せる友達がいることが、児童・生徒にとって大きな励みになる場合もある。今後も復帰の方法や段階について保護者や学校及び関係機関と連携・協力することが必要である。
- ③ 児童・生徒の成長や学校復帰の実現のために保護者及び学校との相談、学校（担任等）との連携が必要である。そのために、保護者と面談や連絡が取りやすい関係づくり、そして長期欠席児童・生徒に対する学校の理解と適切な対応がより期待される。

5 学校・家庭・地域・関係機関との連携

(1) 学校との連携

- ① 児童・生徒の通室状況と学習や行事・生活等の活動状況を在籍校に毎月報告した。また、学校での指導状況を報告書で返信してもらうことにより、指導の充実を図った。
- ② 学期に1回「わかば教室連絡会」を開き、在籍校の管理職や担任等と情報交換を行った。平成27年度から、全体会1回、個別会（学校別）2回の形態で実施している。児童・生徒の活動状況の参観の要望には随時対応し、相互理解や連携に役立てた。
- ③ 日野市立小・中学校全校を対象に1・2学期に分けて学校訪問し、通室する児童・生徒の状況を把握するとともに「わかば教室」での様子について情報交換した。
- ④ 校長（副校長）・コーディネーター・担任等と随時電話連絡や面談を行った。
- ⑤ わかば教室と学校間では、毎月「通室状況報告書」を作成し、相互の連絡を通して、情報の共有化を図り、個々の児童・生徒への指導に活かしている。

(2) 家庭との連携

- ① 保護者会を年3回実施した。児童・生徒の教室での様子や家庭での様子について相互に知る機会となり、児童・生徒に対するよりよい支援を考える機会とした。
- ② 月1回発行の「わかば通信」を配布し、児童・生徒の活動の様子を知ってもらうと同時に、行事への参加を呼びかけてきた。
- ③ 保護者との面談、電話連絡を適宜実施し、保護者との相互理解を深め、連携・協力して児童・生徒の課題の改善に努めた。

(3) 地域との連携

- ① スクールカウンセラー連絡会、子ども家庭支援センター運営委員会に参加し、登校できなくなっている児童・生徒への理解や対応について相互理解を深めるようにした。
- ② 地域の施設や機関の協力を得て、体験学習や地域との交流を図った。

(4) 関係機関（一般教育相談係、SSW、登校支援コーディネーター等）との連携

- ① 登校支援コーディネーター及び発達・教育支援センター（エール）のSSW（毎週1回電話）と必要に応じ情報交換を行い通室生への対応（支援・指導）に役立てた。

6 わかば教室における指導の成果と課題

(1) 成果

- ① 児童・生徒に見られる変容
 - ・元気な挨拶や返事、発言がみられ、指導員とも良好な関係を築くことができてきた。
 - ・指導員やボランティアと行う遊びやスポーツ活動で体力もつき、自分の気持ちや感情も穏やかに表現できるようになってきた。
 - ・小集団活動やSSTで、友達との挨拶や会話ができるようになり、学習タイムにも参加し「わかば教室」の日程に沿って行動できるようになってきた児童・生徒もいる。
 - ・学習や行事に参加することから通室回数も増え、自信をもった児童・生徒が見られ、共に楽しみ合う姿も見られるようになってきた。
 - ・朝、在籍校に登校してから通室したり、「わかば教室」で活動してから登校したりする児童・生徒や、定期テストを在籍校で受ける中学生の姿が見られた。
- ② 学校・家庭・関係諸機関の本教室への理解、連携、協力に見られる成果
 - ・今年度も、SSWの働きかけや登校支援コーディネーターの情報により、閉じこもりがち

であった児童・生徒が通室するようになった事例が見られた。

- ・個人差はあるが、安定して通室できるようになったことから、部分登校する児童・生徒や学校復帰しようとする児童・生徒も見られた。

(2) 課題

- ① 支援や指導により児童・生徒がエネルギーを回復するとはいえ、友達関係や学習への不安は大きく、登校できても教室に入れない事例も見られる。児童・生徒の思いを大切にしながら在籍校、家庭と連携して学校復帰に向けて、支援していくことが大切である。
- ② 通室する児童・生徒（体験通室生含む）の増加に伴い、個別指導の部屋や指導員の不足により、多様なニーズへの決め細やかな個別支援に困難な状況があった。現状の実践を見直し、さらに工夫、改善していくことも必要である。
- ③ 通室を始めても、家庭生活実態等で通室日数が減少してしまう児童・生徒もある。この場合は、子供に対するカウンセリングや保護者との面談が必要である。
- ④ 入学時、就学相談の結果がほぼ尊重され、特別支援学級へ進級した児童・生徒も通室している。進級後、不登校になり「わかば教室」に通室する例があることも課題の一つである。小学校から中学校への進学にあたっては「かしの木シート（「わかば教室」の関わりはない）」等の個別の支援計画を活用して互いの連携をより緊密にする必要がある。

IV 健全育成に関わる事業

「学校生活相談係」の業務は、大きく二つに分けられる。第一は学校生活で課題を抱えている児童・生徒の生活改善指導、進路指導（特に進路に関する情報収集と生徒への資料の提供）である。第二は教職員や保護者との学校生活上の相談である。今年度実施した健全育成の業務に関わる具体的内容は次の通りである。

1 学校訪問を行い、児童・生徒の課題把握・共有と早期対応・解決の推進

- (1) 児童・生徒の健全育成に関する実態把握と各学校の取り組み状況を知るため、1学期、2学期を通して市内の小・中学校全校（25校）を訪問した。
- (2) 学校訪問で得た児童・生徒に関する情報・課題を基に、学校及び関係機関及び保護者等と連携を図りながら、通室している児童・生徒に対する支援に努めてきた。

2 登校しぶり、登校できない生徒の進路指導の支援

- (1) 公・私立高等学校、サポート校、通信制の学校等の資料収集、学校案内資料の収集と通室生への情報提供等に努めた。
- (2) 在籍校（担任等）、保護者と連携を取りながら、進路指導（情報提供・書類作成・作文指導・面接練習）に対する支援を行った。

3 「わかば教室」の児童・生徒の健全育成に関わる支援

- (1) 通室している児童・生徒が在籍している小・中学校の生活の決まりと「わかば教室の生活の決まり」を基に生活面や行動面での支援・指導をしてきた。
- (2) 学校生活相談係の事業は、今後も様々な「健全育成」の課題に応えていかなければならない。各種不適応行動や特別支援に関わる課題の相談も多くなってきている。学校及び関係機関と今まで以上に協力・連携して支援をしていくことが不可欠となっている。

2 登校支援としてのeラーニングを活用した学習支援

I 概要

登校支援対策の観点から、日野市eラーニングシステム「アクティブラーニング〔日野市版〕」を活用し、個に応じた学習支援をICT活用教育推進室と協力して実施した。今年度のeラーニングを活用した学習支援は、「わかば教室」に通室している児童・生徒を対象として行っている。

II 「わかば教室」に通室している児童・生徒のための学習支援

1 目的

「わかば教室」に通室している児童・生徒に対して、学習活動時間の中でeラーニングを活用し児童・生徒の学習支援や学校復帰への支援を行う。

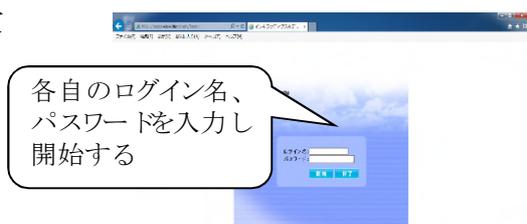
2 内容・方法

- (1) 一人一人の児童・生徒に応じた学習活動を支援するために、週に2回「わかば教室」の学習時間内に行った。(活動場所は主として教育センターパソコン室)

学習時間は、「わかば教室」時間割内に設定し実施した。

固定時間割 火：学習タイム1→小学生
 学習タイム2→中学生
 木：学習タイム1→小学生
 学習タイム2→中学生

特別時間 水：14：00～16：00(申込み制)



各自のログイン名、パスワードを入力し開始する



〔上図はPCスタート画面〕

- (2) 児童・生徒は、eラーニングの教材である「アクティブラーニング〔日野市版〕」を活用して、個に応じた学習に取り組み、学習に対する興味・関心を高め、学習への不安をなくしていく。
- (3) 「アクティブラーニング〔日野市版〕」を利用する児童・生徒に対し、登校支援員及び指導員が学習支援を行った。

3 取り組み

eラーニングは、教科学習・集団学習を行うとともに学習習慣を身に付ける場として定着している。(平成29年度2学期から新システムが稼動) 固定学習時間の設定は、eラーニング学習時間に間に合うように通室を促すとともに、学習意欲の維持・継続を図り、学習の積み重ねができるように配慮したためである。

学習のつまずきや内容が理解できていない児童・生徒には、eラーニング担当者がその場で個別に学習支援をすることで、児童・生徒が安心して学習に取り組むことができた。

4 わかば教室に通室できない児童・生徒のための学習支援

さまざまな理由から「わかば教室」にも通室できず、長期間の欠席状況の傾向にある児

童・生徒に対して、eラーニング学習室で学習できる機会を設定し、児童・生徒の学習支援や学校復帰への支援を図る。こうした学習を通して、不登校児童・生徒が、家から一歩踏み出したり、「わかば教室」へ通うきっかけとなることが期待されている。

5 成 果

一人一人の学習意欲を高めさせる工夫として、eラーニングの学習を記録させることができた。また、「アクティブラーニング〔日野市版〕」を活用することにより、学習に取り組んだ内容が記録・確認でき、自らの学習の積み重ねが分かり、教材選択の幅が広がって学習への取り組みが意欲的になってきた。さらに、学習の習熟度を高める工夫として、繰り返し学習を行った。また、一人一人の学習理解度に応じた問題の解説を行うことができた。

学習方法や基礎的な知識を身に付けさせることで学習への不安が軽減され、さらに学習したいという意欲の芽生えは、学校復帰へのきっかけや進学への希望の一因となる。

また、平成28年度までは、個別の学習記録を学期ごとに所属校あてに通知して連携を図ってきたが、平成29年度から、在籍校から直接確認できるシステムになっている。

3 登校支援コーディネーター

1 「日野サンライズプロジェクト」に基づく本年度の取り組み

- (1) 出席状況調査の集計・分析、集計結果の情報提供
- (2) 学校との連携
 - ①わかば教室と連携して市内全小中学校を訪問（長期欠席児童生徒に関する情報交換）
 - ②学校で行われるケース会議やサポート会議への参加
- (3) 関係機関との連携（エール、SSW、子ども家庭支援センター等との情報交換）
- (4) わかば教室との連携（出席状況調査に基づく情報交換等）
- (5) 生活指導主任研修会での出席状況調査の集計・分析に基づく情報提供・助言等
- (6) 子ども家庭支援センター主催による各中学校区ネットワーク会議への参加

2 児童生徒の長期欠席者数の現状

(1) 今年度2学期末時点における30日以上欠席者数。()内は昨年度の数值

	男子	女子	計
小学校	60 (55)	32 (37)	92 (92)
中学校	89 (94)	97 (104)	186 (198)
小中計	149 (149)	129 (141)	278 (290)

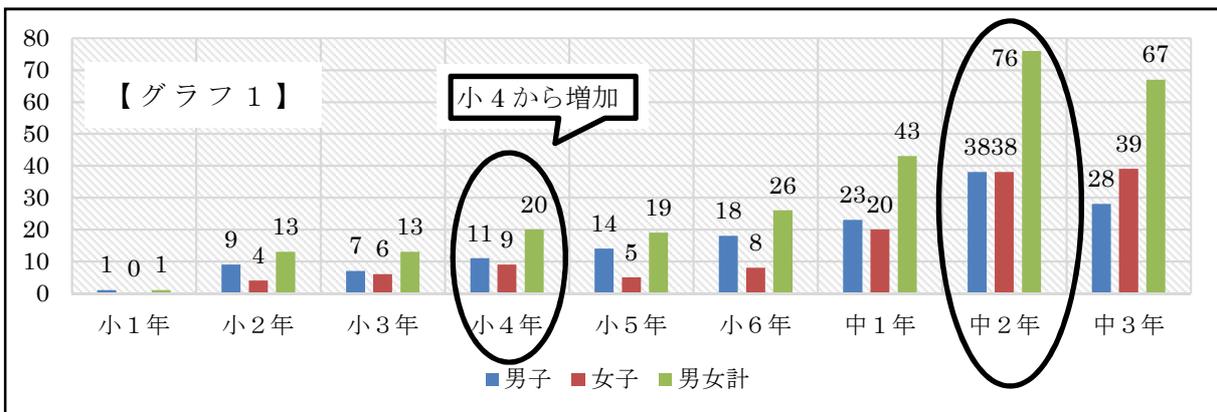
<長期欠席者の出現率>

小学校 0.98% (0.99%)

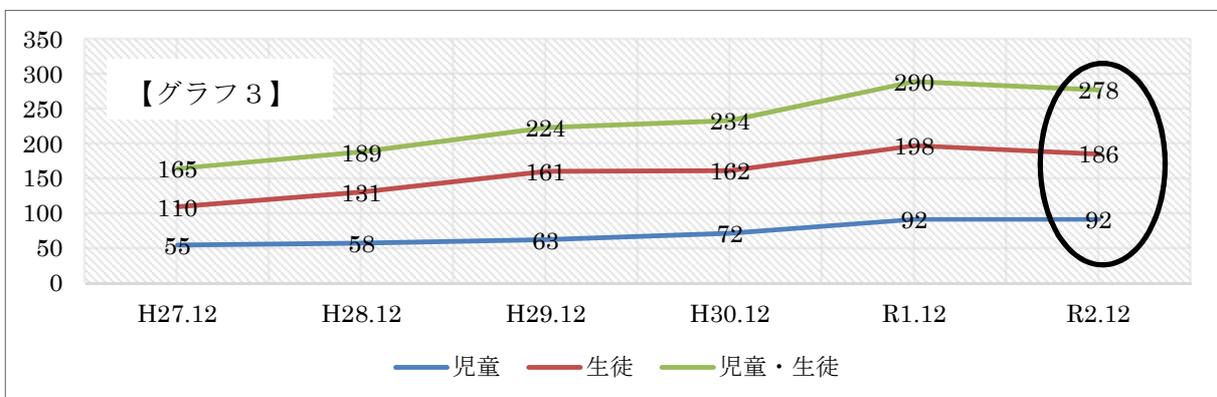
中学校 4.38% (4.69%)

小・中 2.04% (2.14%)

(2) 今年度2学期末時点の長期欠席児童生徒数を示すグラフ【グラフ1】

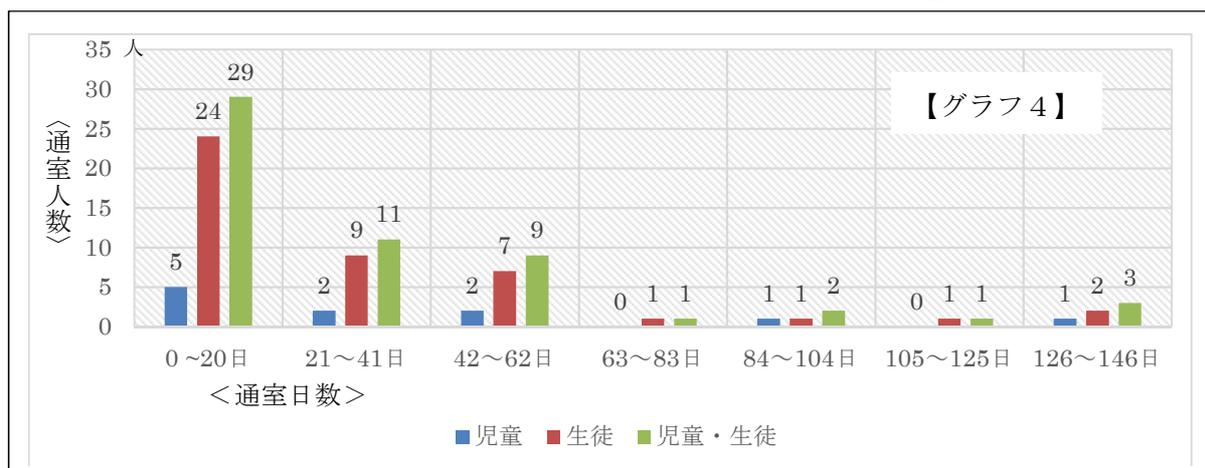


(3) H27年度より各年度12月時点の30日以上欠席児童生徒数の推移【グラフ3参照】

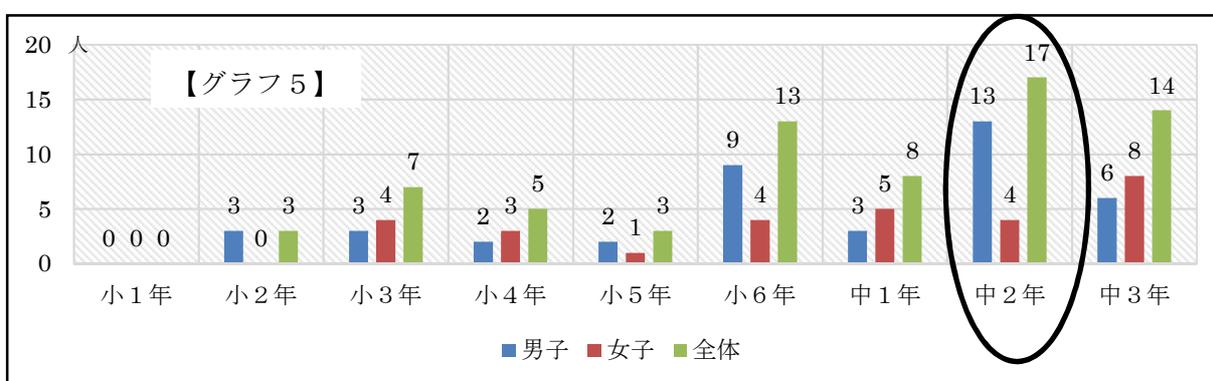


※今年度12月、初めて児童生徒合計数で下降を示した。

(4) 30日以上学校欠席者のうちわかば教室に在籍する児童生徒数及び通室状況



(5) 出席状況調査掲載児童・生徒（30日以下欠席者を含む）のSSWとの連携状況



2 出席状況調査の記述欄の読み取りから

- (1) 不登校の理由として体調不良が多く、体調不良が登校しづり、長期欠席のきっかけとなっているケースが多い。体調不良の初期段階での対応が大切である。
- (2) 深夜から明け方にいたるゲームによって朝起きることができなくなる。生活リズムを立て直すことができないまま昼夜逆転になり、長期欠席になるケースが多い。中には、保護者の指導に反発し、暴言・暴力行為にいたるケースもある。
- (3) 児童、生徒ともに精神的な不安定が年々増加する傾向にある。また、医療機関での診断や投薬治療も徐々に増えてきている。特に精神的な不安定さからくる希死念慮に注意が必要である。
- (4) 保護者の身体的、精神的不安定も増加傾向にある。

3 まとめ

(1) 連携・協力による取り組み

学校と関係機関や専門家との連携が年々進んできており、連携を進めていく中で様々な取り組みの効果がみられる。

(2) 連携を進める中での子供の心の耕し（キャリア教育の視点をもって）

- ①人と共に生活することの意味や大切さ
- ②学び続けることの大切さ
- ③成長に伴う自律と自立

編集後記

令和2年度日野市立教育センター紀要「第17集」を発刊する運びとなりました。

教育センターは、学校や教員に児童・生徒への郷土教育に必要な資料の作成や情報の提供、理科授業に必要な教材、実験・実技の向上につながる指導・助言、教材の提供、機材の貸出、研修等を行い、特に若手教員には授業力や学級経営力向上につながる授業観察・助言等の支援を行い、微力ながらも日野市の学校教育の発展に尽くしてきました。

わかば教室では、通室する児童・生徒一人ひとりの教科の習熟度や進度等によってきめ細やかな学習支援を行い、教室の様々な行事を通じて社会性を育ててきました。加えて、一緒に学ぶことが難しい児童・生徒の居場所となれるよう務めてきました。

現在、教育センターでは、調査研究部・研修部・相談部の三つの部で事業を行っております。今年度の事業内容及び成果をお知らせするため、本紀要としてまとめました。

ご高覧いただければ幸いです。

本年度、日野市立教育センター事業及び、本紀要の発刊に関して温かくご指導・ご助言いただきました関係各位に厚くお礼申し上げますとともに教育センター事業にご支援・ご協力いただいた地域の皆様、わかば教室の関係者の皆様、市内の各機関の皆様方に心より御礼申し上げます。

<編集委員>

編集長（教育センター所長）	正 留 久 巳
主任研究員	谷 川 拓 也
統括指導主事	田 村 孝 夫
事務長	田 中 勉
教育センター所員	千 葉 正 吉 村 正 久
	岡 部 秀 敏 須 藤 昭 人
	中 村 康 成 井 口 進
	岩 井 徳 二 清 野 利 明
	池 本 ユウ子

日野市立教育センター紀要

第17集

発行日	令和3年3月31日
発行	日野市立教育センター
所長	正 留 久 巳
	〒191-0042 日野市程久保 550
TEL	042-592-0505
FAX	042-592-1148
Eメール	: k-center@city.hino.lg.jp
URL	: www.hino-tky.ed.jp/center/

